ベルギー出身の才人率いる注目のジャズ・プロジェクト

エリック・レニーニ&
ザ・アフリカ・ジャズ・ビート

Eric legnini
And The Africa Jazz Beat

Interviewed by Ryo Okusawa
取材：奥沢 涼
Photo by Jean-Baptiste Millot
写真提供：キングインターナショナル

2000年代半ば以降にリリースした『ミス・ソウル』『ビッグ・ブーガルー』『トリッピン』などの高品位の作品群で、日本でも高く評価されるベルギー出身のピアニスト、エリック・レニーニ。近年の活動の中心となっている「アフロ・ジャズ・ビート」の第2作も最先端ジャズが詰まった名盤に仕上がった。

アフリカ・ジャズ・ビートは様々なインスピレーションを自分の音楽に落とし込む夢を実現するために作ったバンド

もともとファンクやゴスペルが好きだった自分らしさを取り戻したパリ時代

――2005年リリースの『ミス・ソウル』は約10年ぶりのリーダー作でした。

エリック・レニーニ(以下**EL**)：1995年の『Rhythm Sphere』はベルギー時代の最高のものを集めた作品でした。その後出会ったイタリア人のステファノ・ディ・バティスタ(as,ss)、フラヴィオ・ボルトロ(tp)と共にパリへ移住。彼らのグループでの演奏に10年間没頭し、年間で60～80回のコンサートをこなしていたので、フランスでは有名になることができたと思います。ステファノから独立して作ったのが『ミス・ソウル』です。

――90年代前半のアルバムではキース・ジャレットからの影響が強く認められましたが、同作では音楽性の変化を感じました。

EL：その10年間に数多くのピアニストをよく聴いて、たくさんの発見があったことが、変化の原因だと思います。16歳でキースの『スタンダーズ Vol.1』に衝撃を受けてからは、今でもキースが大好きです。しかしヨーロッパの白人ピアニストならばビル・エヴァンス風やチック・コリア風でなければいけない、といった定番的な考え方が次第に物足りなくなってきました。そんな頃、ダド・モロニ(p)と出会って大きな影響を受けました。レス・マッキャン(p)の曲の弾き方に衝撃を受けたのです。それがきっかけでボビー・ティモンズ、ジュニア・マンス、レイ・ブライアント、フィニアス・ニューボーンJr.、モーリス・ナントンといったピアニストを改めて聴くようになりました。18歳の時のニューヨーク時代はハービー・ハンコック、ケニー・カークランド、マッコイ・タイナーから影響を受けていましたが、もともとファンクやゴスペルが好きだったので、自分らしさに戻してくれたのがパリ時代だったのだと思います。『ミス・ソウル』はフィニアスへのオマージュです。

――2007年の『ビッグ・ブーガルー』はファンキー／ソウル・ジャズ路線を前進させた趣があります。

EL：伝統から少しずつ離れてみる実験をするなかで、ファンクの方向に進んだアルバムです。確かにブーガルーと言えばレス・マッキャンやルー・ドナルドソンが浮かびますし、マッキャンの「ブリーチャー」をカヴァーしています。スタンダード・ジャズやスウィング・ジャズではないけれど、まだジャズとの接点があるという意味で、ソウル・ジャズに一歩を踏み出した内容ですね。

――2009年の『トリッピン』では初めてフェンダー・ローズ・ピアノを使用されました。

EL：ソウル・ジャズをたくさん聴いていましたが、自分の作品ではあくまでアコースティック・ピアノで通していました。ある日、友人に「そんなにソウル・ジャズを聴いているのに、フェンダー・ローズを弾かないのはおかしいんじゃないか」と指摘されました。それで弾いてみる気になったのが『トリッピン』です。それまでも一作ごとに変革を加えたい気持ちを持ち続けていて、同作ではローズの導入がそれだったわけです。ポップなナンバーが増えて、作曲の方法も変わりました。ここまでの3枚では最も評判が良く、若いファンが増えたのは、ぼくのトリオが彼らにジャズを聴くきっかけを与えた点で、嬉しく思っています。

――作曲方法の変化に関して、具体的に教えてください。

EL：ひと言でいえば、ファンク色が強まった、ということです。コードがシンプルになり、それゆえポップなサウンドになりました。ピアノではうまくいくコードが、ローズ・ピアノではそうならないことがあるので、ローズを活かすことを心がけました。ローズの音そのものからインスピレーションを受けて、そこから新しいサウンドが生まれるケースもありました。

『Sing Twice!』
Eric Legnini and The Africa Jazz Beat
DISCOGRAPH 6150022（海外盤）

●Tracking List● ①Sing Twice！②Salisbury Plain ③Snow Falls ④Yan Kadi ⑤Winter Heron ⑥If Only For A Minute ⑦Carmignano ⑧The Source ⑨We Love Shibuya ⑩Cinecitta

●Personel● Eric Legnini(p,rhodes, kb,perc), Franck Agulhon(ds,perc), Thomas Bramerie(b), Hugh Coltman (vo), Mamani Keita(vo), Emi Meyer(vo), Boris Pokora(sax), Julien Alour(tp), Jerry Edwards(tb), Da Romeo(g), Xavier Tribolet (modular), David Donatien(perc)

■前作「The Vox」で話題を呼んだエリック・レニーニ＆ザ・アフロ・ジャズ・ビートの第2作。ジャズ、ファンク、ラテン、アフロなど、様々な音楽を要素を盛り込みながら、レニーニらしい美メロディは健在！　女性＆男性シンガーをフィーチャーして、ロバート・グラスパーなどにも通じる最先端ジャズを志向する。

profile エリック・レニーニ
1970年2月20日、ベルギーのリエージュ出身。イタリア系移民でオペラ歌手でもあった母親の影響でピアノを始め、16歳の時に聴いたキース・ジャレットの「スタンダーズ Vol.1」に衝撃を受ける。20歳前後から欧州各地のトップ・ミュージシャンと交流をはじめ、90年代前半にリーダー作を連続して発表後に渡米。リッチー・バイラークに2年間師事し、帰国後同郷ルーツを持つスティファノ・バティスタのレギュラー・ピアニストとして欠かすことのできない存在として活躍。"ベルギーの逸材"と称された。12年ぶりのリーダー作となった「ミス・ソウル」(2006年)はフィニアス・ニューボンJr.へのオマージュ作品で、ファンキーなスタイルを提示。ラテンのリズムも取り入れた2007年の「ビッグ・ブーガルー」、2009年の「ザ・トリッピン」でも世界的な高評価を獲得、日本でもユーロ・ジャズを牽引する新たな存在として注目を集めた。近年はシンガーもフィーチャーした「ザ・アフリカ・ジャズ・ビート」を率いて、さらなる次元のジャズを目指している。

新作はアフリカンでありながら、同時に立派なジャズ・アルバムとして成立

――現在のバンド"アフロ・ジャズ・ビート"はどのような経緯で結成されましたか？

EL：バンド名ありき、から始まっていて、その時の自分の気分を一番わかりやすい言葉で表わしたものです。そしてその名前にふさわしいユニットを作りたいと思いました。フランク・アギュロン(ds)は、最初からぼくと一緒に同じ方向性で進んでくれた重要人物です。スライ＆ザ・ファミリー・ストーンが好きだった10代に、トニー・アレンの2枚のアルバムにはまって強く影響を受けました(アレンはナイジェリア出身のドラマーで、アフロ・ビートの創始者。フェラ・クティの右腕としても活躍した)。トランス・ミュージックのビートにすごく興味を持っていて、アフロ・ジャズとも違うまったく新しいビートをそこで創造している瞬間を目撃したような衝撃でした。そこから受けたインスピレーションを、いつか自分の音楽に落とし込みたいと思ってから、自分の音楽にするまでに時間がかかりましたが、その夢を実現するために作ったバンドなのです。

――第1弾の『ザ・ヴォックス』にはヴォーカリストが参加していますが、バンドのレギュラー・メンバーなのですか？

EL：専属の歌手はいません。アフロ・ジャズ・ビート(AJB)はひとつのコンセプト、スピリットだと考えていただければいいと思います。マヌ・カッチェ(ds)が司会とリーダーを務めるフランスのテレビ番組に、ハウス・バンドのメンバーとして出演していた時に、ラファエル・サディーク、ジョシュ・ストーン、ブライアン・フェリーらヴォーカリストと共演。そこで出会ったクリストル・ウォーレンの歌声に心を動かされて、アルバムに参加してもらいました。今思えば、同作で本当にやりたかったことは『シング・トゥワイス！』でやったことなんです。

――第2弾の最新作ですね。

EL：ぼくはやることに時間がかかる性質だと思います(苦笑)。『ザ・ヴォックス』でもアフリカ的なサウンドを取り入れたのですが、まだ十分ではなく、もっと強く押していけば良かったという気持ちが残りました。新作はアフリカンでありながら、同時に立派なジャズ・アルバムに仕上げることができたと自負しています。

――アルバム名となっている"Sing Twice!"の由来は？

EL：ネーミングに悩んでいた時に、「Think Twice」(決断する前に、もう一度考えよ)という言葉が浮かび、いつの間にか「think」が「sing」になりました。第2弾と「twice」の意味が重なるのもこの言葉を選んだ理由です。

――前作はひとりでしたが、新作には3人のヴォーカリストが参加しています。

EL：クリストルが別のプロジェクトのために参加できないとなって、推薦されたのがヒュー・コールマン。パリのシンガー・ソングライターはすぐにバンドに融け込んで、今では彼に刺激を受けて作曲をしているほどです。「イフ・オンリー・フォー・ア・ミニット」はヒューを輝かせるために、スティーヴィー・ワンダーのテイストを持ち込んで書きました。ママミ・ケイタは前作でも参加をオファーしたものの実現せず、引き続きお願いしていたところ、ベルギーの音楽祭がきっかけとなって今回共演できました。エミ・マイヤーは彼女のデビュー作から聴いていて、ローファイでポップな印象を持っていました。新作では女性のポップな声が欠けていると感じたので、そこをエミがうまく埋めてくれたと思っています。

――マリ出身のママミに母国のバンバラ語での作詞と歌唱を依頼した理由は？

EL：それが彼女自身を表現する上でベストだと思ったからです。英語で歌うと艶が出ないし、不自然だと思いました。「ザ・ソース」はママミの母国をテーマにした歌詞で、何か自分自身とも重なる印象があります。家族やルーツの大切さや母への感謝を歌っていて共感できます。ママミが作詞したもうひとつの「ヤン・カディ」は単純に最高だというパーティ・ソングで、特に深い意味はありません。

――今後の活動について教えてください。

EL：もともとのトリオのメンバーだったトマ・ブラメリ(b)とフランク・アギュロンが、AJBのメンバーでもあり、今後ヨーロッパでは管楽器とふたりの歌手をフィーチャーしたAJBでの活動がメインになります。自分の母親がオペラ歌手だったこともあって、音楽の要素の中で声は大切なものだと考えていました。若い頃からアンリ・サルヴァドール、クロード・ヌーガロ、ダイアン・リーヴス、ミルトン・ナシメントらの歌手と共演する仕事をたくさんしてきましたが、自分のアルバムにシンガーが参加することはありませんでした。ようやくそれができる、良い時期が訪れたと思っています。■